The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	古典物語作品における談話分析 ： 話者交替の位置に現れる「サテ」について
Author(s)	百瀬, みのり
Citation	詞林. 2017, 62, p. 28-49
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67206
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

古典物語作品における談話分析
――話者交替の位置に現れる「サテ」について――

百瀬みのり

一．序

一．一．はじめに

本論は古典の物語作品中の登場人物等による対話場面を取り上げ、対話の話者が交替する位置に現れる「サテ」に注目してその機能を考察するものである。「サテ」は指示副詞「サ」に接続助詞「テ」が付いた語構成を持ち、古代から使用されてきた語である。[1] 中古物語作品において「サテ」は、

（1）「ねむごろにも、尋ね問はで、さて、なま疑ひてぞ、ときどき、ものいひやりける。」（『平中物語』三六段、五二三頁）[2] と、副詞的用法で、また

（2）「むかし、男、武蔵の国までまどひ歩きけり。さてその国にある女をよばひけり。」（『伊勢物語』十段、一二三頁）

と、接続詞的用法で用いられた例が見られるが、そのほかに、

（3）「この鹿の鳴くは聞きたうぶや」といひければ、「さ聞きはべり」といらへりけり。男、「さて、それをばいかが聞きたまふ」といひければ、女ふといらへけり。」（『大和物語』一五八段、三九四頁）

と、対話場面の話者が交替する位置に現れる例も見られる。本論ではこのような、物語作品中の登場人物等による対話場面の話者が交替する位置に現れる「サテ」に注目し、それを「引き取りのサテ」と名付けてその機能を「サテ」の機能全体の中で位置付ける。そして「引き取りのサテ」が聞き手の発話を引き取って疑問文を後接し、疑問文と応答文の組（ペア）を作って談話を展開させていく機能をもつことを示す。

なお、本論において古典物語作品とは中古、中世期に成立したとされる和文物語作品を指す。

一．二．先行研究と問題の所在

古典の物語作品の談話分析を行った先行研究にはロング（1995）や信太（1995）がある。

ロング（１９９５）は『源氏物語』中の談話に見られる「依頼」の場面に注目し、「率直に言う」、「間接的に依頼する」、「相手の対場に対する理解を示す」、「依頼の負担を小さく見せる」などの方法を取って「依頼」を行っていることを例を挙げて示し、「状況にふさわしい間接的な（あるいは直接的な）依頼が選択されること、そして、相手の立場に対する理解を示したり負担を小さく見せたりする表現（「なほ」「すこし」など）を複合的に用いることによって、依頼をより受け入れやすいものにしていることがわかった。」（ロング・同、二六頁）と述べる。

また、信太（１９９５）は、『平家物語』覚一本と延慶本に見られる談話の会話文の引用形式について、会話主体を明示する例と非明示である例の二例の型があること、格助詞の「にして」、「にて」、「で」に注目すると、延慶本はいずれの格助詞も会話文よりも地の文の方に多く使われているが、覚一本は「にして」、「にて」は同じく会話文よりも地の文に多く使われている一方「で」は地の文よりも会話文に多く使われていること[3]、また、形容詞については覚一本では地の文に三六例、会話文に七二例のイ音便形が見られるのみで、非音便形が多数を占める（助動詞は含まず）こと、推量、希望の助動詞については、推量の助動詞「う」「らう」「やらう」は引用文、会話文でのみ用いられていること、希望の助動詞「たし」「まほし」は、一例ずつの例外はあるが、地の文で「まほし」、会話文で「たし」が用いられていることを示し、「これらは言文二途の傾向を示している。」（信太・同、四〇頁）と述べる。

両研究は中古、中世の物語作品の対話場面に現れた人物の配慮や、地の文と比した対話文の形式について調査を行ったものであり、特に地の文とは異なる対話文であることの特性に注目した調査である。しかし、これらは論者が述べたいことや調査したことを述べるために「談話分析」という体裁を取っているものもあり、これらを物語作品の談話分析というには再考の余地があると思われる。

そこで本論は先行研究と反対に、物語の対話文のまとまりである談話そのものを取り上げ、地の文とは異なる対話文であるからこそ認められるその特質から談話分析を行うこととする。

一・三　本論での術語について

古典物語作品の談話分析を行うに際し術語について説明する。

まず、「談話」については、佐久間（２０１０）による、「一定のまとまりをもった言語・非言語行動の単位」を本論での「談話」の定義とする。本論では「対話文」が複数まとまった部分を「談話」と考えるためである。また西野（１９９３）を基に、「意味内容を伝える要素（ことば）以外に、対話の

流れの中で対話の内容理解を助けるためのもの、対話者間のやり取りをよりスムーズにするためのもの、対話者間の人間関係を円滑にするためのものなど[4]」を「談話標識」として本論では考える[5]。「対話文」については、その対話文と見なされる文に対する引用符（「　」）の表記の有無や、文末に「～と申す」、「～と言ふ」などのその文が登場人物の言表動作であることを表す動詞の記載の有無をもって判断するものとする[6]。

次に中井（２００３）を基に、「対話の中で、一人の参加者が話を開始してから終了するまでの連続した単位」を「発話順番」として対話を考える際の一つのまとまりを表す単位とし[7]、この「発話順番」が替わり発話者が替わることをメイナード（１９９３）を基に「話者交替」とする[8]。

二．考察「引き取りのサテ」について

二．一．「サテ」の用例数

まず、古典の物語作品中の「サテ」の用例数を確認する。（表一）は本論で資料とした中古の、（表二）は同中世の古典物語作品に見られる「サテ」の用例数である。用例は「サテ」が現れる文中の位置の別により、【地の文・文頭】、【地の文・文中】、【非地の文・文頭】、【非地の文・文中】の別に示す。ここで【非地の文】とは、【対話文】、【心内話文】【文（手紙）の文】を指すものとする。

資料名は表中では略して示し、『大和』は『大和物語』、『平中』は『平中物語』、『落窪』は『落窪物語』、『枕』は『枕草子』、『源氏』は『源氏物語』、『堤』は『堤中納言物語』、『浜松』は『浜松中納言物語』、『住吉』は『住吉物語』、『とりかへ』は『とりかへばや物語』、『保元』は『保元物語』、『平治』は『平治物語』、『平家覚一』は『平家物語』・覚一本、『平家天草』は『天草版平家物語』、『狂言』は『狂言集』を指す。（以下同。）

また、本論の用例は「サテ」に注目するもので、「サテハ」、「サテモ」、「サテゾ」、「サテナム」、「サテコソ」などの「サテ」に副助詞、係助詞が付いた形式は考察の対象に含めないものとする。

（表一）

資料＼位置	地の文・文頭	地の文・文中	非地の文・文頭	非地の文・文中	計
『大和』	38	0	1	0	39
『平中』	35	5	4	0	44
『落窪』	4	1	16	3	24
『枕』	27	8	8	2	45
『源氏』	17	12	40	35	104
『堤』	0	1	5	0	6
『浜松』	2	1	4	5	12
計	123	28	78	45	274

（表二）

資料＼位置	地の文・文頭	地の文・文中	非地の文・文頭	非地の文・文中	計
『住吉』	27	0	3	2	32
『とりかへ』	0	1	4	11	16
『保元』	0	0	3	3	6
『平治』	4	0	1	0	5
『平家覚一』	29	1	34	5	69
『平家天草』	45	5	35	3	88
『狂言集』	0	0	211	26	237
計	105	7	291	50	453

二．二．「サテ」の分類

ここでまず、資料中に見られる「引き取りのサテ」も含めた「サテ」の用例について確認しておく。本論では、古典物語作品中の「サテ」を以下のように分類する。

①．「サテ」前部に、その実態が語的・文的な要素として文中に示されている対象と、「サテ」後部との関係付けを行う「サテ」。（ここでは文中に示されている対象の部分に、波線を付して示す。以下同。）

①―A．文中に置かれる「サテ」。

（4）「雨いみじう降るをりに来たる人なむ、あはれなる。日ごろおぼつかなく、つらき事もありとも、さて濡れて来たらむは、憂き事もみな忘れぬべし」（『枕草子』第二七四段、四二五頁）

（5）さて少将わ今しばらくも念仏の功をも積みたうざれども、都に待つ人どもも、心もとなうざらうずるほどに、まづまかり上る：またこそ参らうずれと言うて、亡者にいとまごいをして、泣く泣くそこをたたれた．草のかげでもさこそ名残をしゅう思われつらう：さあれどもさてあらうずることでなければ、そこをたって同じ三月の十九日に少将わ鳥羽え明かうつかれた．（『天草版平家物語』巻第一・第十一、七九頁）

この「サテ」は副詞のようにはたらく。

①―B1．文頭に置かれる「サテ」。（この「文頭」とは、話者が交替する対話文の文頭以外の文頭を指す。）

（6）「かれは、いとあやしき人の癖にて、文一くだりやりつるが、はづるるやうなければ人の妻、帝の御妻も持たるぞかし。さて身いたづらになりたるやうなるぞかし。」（『落窪物語』巻之一、九三頁）

（7）帝聞こしめして、「中納言は、いみじき姫を持ちたまふと聞きたり」と仰せあれば、やがて御請け申されつつ、かしづきたまふ。いよいよあたりも輝くほどにぞ見えたまひける。さてこの姫君、八つばかりにやならせたまふ時、母宮、例ならず悩みたまひけり。（『住吉物語』上巻、一八頁）

この「サテ」は接続詞や副詞のようにはたらく。

①―B2．話者が交替する対話文の文頭に置かれる「サテ」。

（3・再掲）「この鹿の鳴くは聞きたうぶや」といひければ、「さ聞きはべり」といらへりけり。男、「さて、それをばいかが聞きたまふ」といひければ、女ふといらへけり。（『大和物語』一五八段、三九四頁）

（8）「あれはいかなる鳥居やらん」と問ひ給へば、「春日大明神の御鳥井なり」と申す。人多く群集したり。其中に法師の頸を、一つさしあげたり。「さてあのくびはいかに」と問ひ給へば、（『平家物語』覚一本、巻第三・無文、二三二頁）

この「サテ」は、対話の話者の交替を表すマーカー（談話標

識）のようにはたらく。

②．「サテ」前部に、その実態が語的・文的な要素の形で文中に示されていない対象と、「サテ」後部との関係付けを行う「サテ」。（対象そのものとではなく、物語自体が継続していることを表す「サテ」。）

（9）さて、この男、その年の秋、西の京極、九条のほどにいきけり。（『平中物語』三六段、五二二頁〈これは三六段の冒頭に置かれた「サテ」の例〉）

（10）「侍共に矢一つ射かけ候はん」と申しければ、「年来の重恩を忘れて、今此有様を見はてぬ不当人をば、さなくともありなん」と宣へば、力およばでとどまりけり。「扨小松殿の君達はいかに」と宣へば、「いまだ御一所も見えさせ給ひ候はず」と申す。（『平家物語』覚一本、巻第七・一門都落、八三頁）

この「サテ」は、文頭に置かれ、新たな物語、章段、話などの始まりを示すマーカーのようにはたらく。

③．その他。その前後部の関係付けを行わない「サテ」。

この「サテ」は「さてさて」、「これはさて」、「さていかにせむ」、「まずはさて」、「さてこれわ」、「さてこれは」、「何がさて」などの連語の形式をとることもあり、文中で感動詞などとしてはたらく。

（11）「男しもなむ仔細なきものははべめる」と申せば、残りを言はせむとて、「さてさてをかしかりける女かな」とすかいたまふを、心は得ながら、鼻のわたりをこつきて語りなす。（『源氏物語』帚木、八六頁）

（12）波多野、「尤もさこそ候はめ」とて、太刀を抜き、引きそばめて、近付きければ、少き者ども、太刀の影に驚きて、「これは、さて、実に失はんずるにや。暫し助けよや」とて、（『保元物語』下、義朝幼少の弟悉く失はるる事、三五七頁）

分類の結果を（表三）、（表四）に示す。

（表三）・中古（※1）（※3）（※4）

分類 / 資料	①			②	③
	A	B 1	B 2		
『大和』 全39例		37　地頭 （※2）	1　対頭	1　地頭	
『平中』 全44例	4　地中	33　地頭 1　地中 1　対頭	3　対頭	2　地頭	
『落窪』 全24例	1　地中 2　対中	2　地頭 7　対頭 1　手頭	7　対頭	2　地頭 1　対頭 1　対中	
『枕』 全45例	8　地中 1　対中	27　地頭 1　対頭 1　対中	6　対頭	1　対頭	
『源氏』 全104例	12　地中 1　対頭 17　対中 18　心中	17　地頭 21　対頭 2　心頭	12　対頭	3　対頭	1　対頭 （※5）
『堤』 例6例	1　地中	3　対頭	2　対頭		
『浜松』 全12例	1　地中 2　対中 3　心中	1　地頭 1　対頭 2　手頭		1　地頭 1　対頭	
計	71	158	31	13	1
合計	274				

（表四）・中世

分類 ＼ 資料	①			②	③
	A	B 1	B 2		
『住吉』 全32例	2　対中	25地頭	3　対頭	2　地頭	
『とりかへ』 全16例	1　地中 6　対中 5　心中	2　対頭	1　対頭	1　対頭	
『保元』 全６例	1　対中 1　心中	1　心頭		2　対頭	1　対中 （※６）
『平治』 全５例		4　地頭			1　対頭 （※７）
『平家覚一』 全69例	1　地頭 1　地中 2　対頭 5　対中	28　地頭 11　対頭	12対頭	9　対頭	
『平家天草』 全88例	5　地中 1　対頭 1　対中	43　地頭 11　対頭	9　対頭	2　地頭 7　対頭	7　対頭 （※８） 2　対中 （※９）
『狂言集』 全237例		40　対頭 1　対中	68　対頭	14　対頭	89　対頭 （※10） 25　対中 （※11）
計	32	166	93	37	125
合計	453				

（※1）（表三）、（表四）中では、「地頭」は【地の文・文頭】、「地中」は【地の文・文中】、「対頭」は【対話文・文頭】、「対中」は【対話文・文中】、「心頭」は【心内話文・文頭】、「心中」は【心内話文・文中】、「手頭」は【文（手紙）の文・文頭】、「手中」は【文（手紙）の文・文中】を指すものとする。
（※2）草子地・文頭の1例を含む。
（※3）数値は資料中に見られる用例数を表す。
（※4）（※1）（※3）は（表四）にも適用される。
（※5）「さてさて」1例を指す。
（※6）「これはさて」1例。
（※7）「さていかにせむ」1例。
（※8）「さてさて」6例、「さてこれわ」1例。
（※9）「まずはさて」1例、「これはさて」1例。
（※10）「さてこれは」3例、「さてさて」86例。
（※11）「何がさて」25例。

前述したように、本論では（表三）、（表四）で①―B2に分類された「引き取りのサテ」に注目する。

二、三、「引き取りのサテ」の機能

二、三、一、「引き取りのサテ」と疑問文

（表三）、（表四）で「引き取りのサテ」（①―B2）に分類された用例を稿末にまとめて示す。これを見ると、「引き取りのサテ」は、

（13）そのほどに、この女は帰り来て、内裏にまゐりて、友だちどもに、志賀にまうでてありつるやうなどいひける、それを、この男とものなどいひて知れるが、そのなかにありける、「さて、この男はたれとかいひつる」といひければ、（『平中物語』二五段、四九六頁）

（14）行綱ちかうより、小声になって申しけるは、「其儀では候はず。一向御一家の御上とこそ承り候へ」。「さてそれをば法皇もしろしめされたるか」。「子細にやおよび候。」（『平家物語』覚一本、巻第二・西光被斬、一〇八頁）

などのように、疑問文に現れている例が目に付く。そこで、「引き取りのサテ」と同じく「サテ」が文頭に置かれているという構文的な条件が同一である、①―B1、②に分類された「サテ」の用例についても調べ、「引き取りのサテ」と疑問文の相関について検証する。なおここで疑問文と考えるのは、「たれ（誰）」「なに（何）」「いつ」「どこ」「いづこ」「いづく」などの疑問詞、または「や」「か」「なう？」「ぞ？」「の？」などの疑問の意味を表す助詞が文中に置かれている文とする。（表五）は、①―B1、①―B2、②の全用例文に占める疑問文の数である。

（表五）より、中古で77・4％、中世で45・2％と、中古、中世共に、①―B1や②に比して、①B―2に分類された「引

（表五）

	分類	①―Ｂ１	①―Ｂ２	②
中古	疑問文数	16（※12）	24（※13）	2
	全文数（※16）	156	31	13
	割合（％）（※15）	10.3	77.4	15.4
中世	疑問文数	22（※14）	42	25
	全文数（※16）	166	93	37
	割合（％）（※15）	13.3	45.2	67.6

（※12）反語8例を含む。
（※13）反語2例を含む。
（※14）反語3例を含む。
（※15）小数点第2位以下を四捨五入した。
（※16）①―Ｂ１、①―Ｂ２、②の各項目に分類された用例数（「サテ」が文頭の全用例数）を指す。

き取りのサテ」と疑問文に共起性があることが分かる。

次に、「引き取りのサテ」が文頭に置かれた疑問文、つまり（表五）で「疑問文」と考えた文に後続する文に注目する。通常、疑問文にはそれに対する応答文が組となって生じる。

（15）男、「さて、それをばいかが聞きたまふ」といひければ、女ふといらへけり。われもしかなきてぞ人に恋ひられし今こそよそに声をのみ聞けと読みたりければ、限りなくめでて、（『大和物語』百五十八段、三九四頁）

（16）「さてそれをば法皇もしろしめされたるか」。「子細にや及び候。成親卿の軍兵召され候も、院宣としてこそ召され候へ」。（『平家物語』覚一本、巻第二・西光被斬、一〇八頁）

ここでは、このような疑問文と応答文の組が、①―Ｂ１、①―Ｂ２、②でそれぞれどの程度生じているかを検証する。なおここでいう疑問文と応答文の組とは、（15）、（16）の例に挙げたような、話し手の疑問文に対して、聞き手の返答が直接表されている例（（16）など）や、聞き手が返答したという事態が述べられたり、聞き手による返答の和歌などが表されている例（（15）など）の組を指す。

（表六）は、「引き取りのサテ」で始まる疑問文に対し、応答文が生じている割合を、さらに（表七）は本論で資料とした古典物語作品中に見られる疑問文に対し、応答文が生じている割合を示したものである。

（※19）増補部分の3例を含む。

（表六）

	分類	①―Ｂ１	①―Ｂ２	②
中古	応答文が後続している疑問文数（※17）	7	22	1
	全疑問文数（※18）	16（※12）	24（※13）	2
	割合（％）（※15）	43.8	91.7	50.0
中世	応答文が後続している疑問文数（※17）	17	42	25
	全疑問文数（※18）	22（※14）	42	25
	割合（％）（※15）	77.3	100.0	100.0

（※20）増補部分の４例を含む。

（※12）反語８例を含む。
（※13）反語２例を含む。
（※14）反語３例を含む。
（※15）小数点第２位以下を四捨五入した。
（※17）全疑問文数中のうち、応答文が後続している疑問文の数を指す。
（※18）（表五）で疑問文とした数を指す。

（表七）

	物語作品	大和	平中	落窪	枕	源氏	堤	浜松
中古	応答文が後続している疑問文数	48	46	364	102（※19）	756	20	55
	全疑問文数	132	69	604	212（※20）	2916	62（※21）	260
	割合（％）	36.4	66.7	60.3	48.1	25.9	32.3	21.2
中世	物語作品（※22）（※23）	住吉	とりかへ	保元	平治	平・覚一	平・天草	狂言
	応答文が後続している疑問文数	70	68	45	30	300	148	676
	全疑問文数	121	308	99	99	672	295	741
	割合（％）	57.9	22.1	45.5	30.3	44.6	50.2	91.2

（※21）末尾断簡の1例を含む。
（※22）『平家物語』覚一本は「灌頂巻」を含む。
（※23）『狂言集』は「狸腹鼓」、「子の日」を含む。

（表七）において疑問文と考えるのは（表五）、（表六）と同様である。よって、「四位の少将とて、世にすぐれたる人おはしける。『いかで、思ふさまならんことを』とおぼしめしけれども」（『住吉物語』上巻、一二一頁）や、「四海浪静かにして、鳴鳳の声さだかなり。されば、誰の人かこの御位を傾くべきなれども、近衛院は第八の御弟、当腹の宮、愛子の道を承けさせましますよによって、（『保元物語』上、後白河院御即位の事、二一七頁）などは疑問の意味を表していないので、ここでは疑問文とは考えない。

また、（表七）において疑問文と応答文の組と考えた例は、

（i）御門「后にやありけむ」と問はせ給へば、中納言「さしもはべらじ。」（『浜松中納言物語』巻第三、二六六頁）
（ii）使「いかなるぞ」と下衆女に問へば、女「上の、今宵、にはかに亡せたまひにければ、ものもおぼえたまはず。」（『源氏物語』蜻蛉、二〇三頁）
（iii）「主上はいづくにましますぞ」、「黒戸の御所に」（『平治物語』上、光頼卿参内の事付けたり清盛六波羅上着の事、四三七頁）

などを指す。

（表六）より、中古で91・7％、中世で100・0％と、中古、中世共に、①―B1や②に比して、①B―2に分類された、「引き取りのサテ」で始まる疑問文には応答文が後続する割合が高いことが確認できた。また、（表七）より「引き取りのサテ」が文頭に置かれていない疑問文は、本論で資料とした中古、中世の物語作品においては、応答文が後続している割合が「引き取りのサテ」が文頭に置かれた疑問文よりも低いことも確認できた。

疑問文と応答文は組を作って話を展開させる。これは疑問文全般に言えることであり、その疑問文の冒頭に「引き取りのサテ」が置かれているか否かとは別の問題である。しかし、それが疑問文の中でも「引き取りのサテ」が文頭に置かれている疑問文であることによって、その疑問文と疑問文前部の文中の対象とは関係付けが可能となる。「引き取りのサテ」は指示詞由来の語であるためである。

指示詞が話を関係付ける、つまり話の結束性や首尾一貫性[9]を示すのに寄与することは、M・A・K・ハリデイとルカイヤ・ハサン（一九九七）、庵（一九九六）にも言及がある。M・A・K・ハリデイとルカイヤ・ハサン（一九九七）は、「〈結束性〉には文法的結束性と語彙的結束性の2つの種類がある。」（同・i）とし、文法的結束性を表す要素として指示詞を挙げる[10]。また庵（一九九六）は、指示詞について、「それ自体が自らの解釈を他の部分に依存し、それによりテキス

トに結束性（cohesion）をもたらす指示詞」（同脚注9・41～42頁）と説明する。指示詞は本来、直示用法の場合であればその現場に、照応用法の場合であればその前文脈にその指示内容が示されているのであり、それに由来した「引き取りのサテ」は、「引き取りのサテ」が置かれた文の前部にその「サテ」で指示される対象が示されていることによって、前部文との結束性や首尾一貫性が、「サテ」がない場合よりもより顕示的になる。

二・三・二「引き取りのサテ」と話者交替

二・三・一から、「引き取りのサテ」の文（①―B2）は疑問文と共起し、またその疑問文にはそれに対する応答文が後続する割合が、「引き取りのサテ」以外の「サテ」を文頭に置く文（①―B1や②）や「サテ」を文頭に置かない疑問文よりも高いことが分かった。つまり、その結果ここに「引き取りのサテ」を文頭に置く疑問文と応答文の組が生じているといえる。この意味を考えてみたい。

「引き取りのサテ」は二・二・二で述べたように、話者が交替する対話文の文頭に置かれる「サテ」を指す。つまり、「引き取りのサテ」が表れている段階で既に一回目の話者交替が生じているのである。そしてさらにその「引き取りのサテ」が、話し手から聞き手に対して問いを発することで話し手から聞き手に発話の権利の譲渡が起こり、ここで二回目の話者交替が生じる。疑問文はそれを承けた聞き手に問いに対する答えを要請するという意義を持つことから、疑問文と共起する確立が高いことにより、「引き取りのサテ」で始まる疑問文を承けた聞き手はそれに対して答える文である応答文を発する。ここに疑問文と応答文の組が成立し、話し手と聞き手のやりとりによるテンポの良い談話が構成される。[11]

さらにこの組を成す疑問文に「引き取りのサテ」が文頭に置かれていることによって「引き取りのサテ」の前部と後部の談話の結束性や首尾一貫性が、「サテ」がない場合よりもより顕示的になる。つまり、「引き取りのサテ」によって、「サテ」の実態を示す「サテ」前部の文と、「引き取りのサテ」を文頭に置く疑問文と、その疑問文に対する応答文といった広い範囲に結束性や首尾一貫性を示した上で、話し手と聞き手のやりとりによるテンポの良い談話を展開させることが可能となると考えられる。

三　まとめ

以上、中古、中世に成立したとされる古典物語作品で、「サテ」前部に、その実態が語的・文的な要素として文中に示されている対象と、「サテ」後部との関係付けを行う「サテ」のうち、話者が交替する対話文の文頭に置かれる「サテ」を「引き取りのサテ」として、その機能を考察した。本論では、・「引き取りのサテ」と疑問文には共起性がある。

・「引き取りのサテ」が文頭に置かれた疑問文には応答文が後続する割合が高く、「サテ」で始まる疑問文に対するその割合は、中古で91・7％、中世で100・0％である。

・一方、「引き取りのサテ」が文頭に置かれない疑問文に応答文が後続する割合は、中古で21・2～66・7％、中世で22・1～91・2％と、「引き取りのサテ」が文頭に置かれた疑問文よりも応答文が後続する割合が低いことが確認できた。

・これらの結果より、「引き取りのサテ」を文頭に置いた疑問文は、「引き取りのサテ」以外の「サテ」が文頭に置かれた文や、「サテ」が文頭に置かれない疑問文よりも、応答文が後続する割合が高いと言える。つまり、「引き取りのサテ」が文頭に置かれた疑問文と応答文は組をつくる。

・さらにこの組を成す疑問文に「引き取りのサテ」が文頭に置かれていることによって「引き取りのサテ」の前部と後部の談話の結束性や首尾一貫性が、「サテ」がない場合よりもより顕示的になり、「サテ」の実態を示す「サテ」前部の文と、「引き取りのサテ」を文頭に置く疑問文と、その疑問文に対する応答文といった広い範囲に結束性や首尾一貫性を示した上で、話者交替によって生じる話し手と聞き手のやりとりによるテンポの良い談話を展開させることが可能となると考えられる。

これらについて述べた。

（注）

（1）中古以前の上代における例としては、「網児（あご）の山五百重（いほへ）隠（かく）せる佐堤（さて）の崎さて延（は）へし児（こ）が夢（いめ）にし見ゆる」（市原（いちはら）王（おほきみ）の歌一首、『萬葉集』巻第四・六六二番歌）（原表記：網児之山　五百重隠有　佐堤乃崎　左手縄師子之　夢二四所見）が見られる。ただしこの例については、「上代語にサ・サテの確例がないため、疑問がなくもない。」（『萬葉集』①・三三七頁頭注、『新編日本古典文学全集6』）とある。

（2）以下、用例は『新編日本古典文学全集』（小学館刊行）による。用例脇の傍線は論者による。頁数は同全集の用例が掲載された頁を表す。

（3）信太の調査によれば覚一本地の文に24例、会話文に26例とある。（信太・同、39頁表2による。）

（4）西野（1993）はこの定義について、「対話」の部分を「会話」という語で述べている。

（5）西野（1993）はこれを「ディスコースマーカー」としている。「談話標識」はこの「ディスコースマーカー」の訳語として先行研究で用いられている語である。

（6）これらは本論で資料としている『新編日本古典文学全集』の校訂者による判断に基づくとする考えもあるが、校訂を行った先行研究者に拠る学究的判断に基づく表記や記載であると考えられるため、本論ではこれを尊重し該当文が対話文であることを判断する指標としてこれらの表記や記載の有無を以てすることとしたい。

（7）中井（2003）自身はこれを「ターン」とするが、本論で

はこの概念を指す談話分析での元の術語「Ｔｕｒｎ」の訳語として、メイナード（１９９３）や李（１９９５）などによる「発話順番」という術語を用いる。これは本論の用例に使用した作品が古典の物語作品であることや本論の主旨を鑑みてのものである。ちなみに、「Ｔｕｒｎ」の訳語には「会話の順番」（山崎・吉井（１９８４）、「発話順番」（メイナード（１９９３）、李（１９９５））、「ターン」（木暮（２００１）、中井（２００３））などがある。また、中井（２００３）自身は「ターン」の定義について、「対話」の部分を「会話」という語で述べている。

（8）これは、この概念を指す談話分析での元の術語「Ｔｕｒｎ－ｔａｋｉｎｇ」の訳語として、メイナード（１９９３）が用いたものである。ちなみに、「Ｔｕｒｎ－ｔａｋｉｎｇ」の訳語には「会話の順番取り」（山崎・吉井（１９８４））などもあるが、本論は発話の順番取りという行為よりも、それによって発話者が交替するという事象に注目するものであるため、「話者交替」の術語を採用する。

（9）Ｍ・Ａ・Ｋ・ハリデイとルカイヤ・ハサン（一九九七）は結束性について、「結束性は、テクストの１つの部分と他のもう１つの部分との間に存在する連続性を表している。（略）結束性がもたらす連続性は、ごく一般的なことばで言えば、談話のそれぞれの段階で、先行部分との接触点を示すことにある。このことの意義は、そのような接触点が存在するという単純な事実の中に見いだされる。」（三九二頁）と定義する。また、「首尾一貫性」については、「首尾一貫性は、内容（ＣＯＮＴＥＮＴ）の点だけではなく、英語に備わっている意味手段の中からトータルに選択している点にも見いだされる。そういう意味手段の中には、さまざまな対人関係的（社交的・表現的・意欲的）な要素―たとえば、ムード、モダリティー、強調、その他、話し手が発話場面へ介入する際のさまざまな形式が含まれる。（略）テクストとは、次の２点で首尾一貫性のある談話の一節である。１つ、テクストは、場面の脈絡に関して首尾一貫性があり、したがって使用域においても整合性がある。２つ、テクストは、それ自体に関して首尾一貫性があり、したがって結束的である。」（二九頁）と述べる。この言及を踏まえて本論では首尾一貫性について、内容と形式の両面において整合性や共有性が見いだせる性質、と考える。なお、Ｍ・Ａ・Ｋ・ハリデイとルカイヤ・ハサンは英文について考察対象としているため、英文で書かれた内容を持つまとまりを指して「テクスト」と言っているが、これは本稿で考察対象としている和文物語作品の「話」と考えて論考することとする。

（10）Ｍ・Ａ・Ｋ・ハリデイとルカイヤ・ハサン（一九九七・ｉ～ii）は文法的結束性を表す要素として、（1）指示詞（人称詞、指示詞、比較語）、（2）代用（名詞の代用、動詞の代用、節の代用）、（3）省略（名詞句の省略、動詞句の省略、節の省略）、（4）接続（付加的、反意的、因果的、時間的）な要素があり、語彙的結束性を表す要素として、（1）再叙（同一語、同意語、上位語のそれぞれによる再叙）（2）コロケーションを挙げる。

（11）このような組についてメイナード（一九九三）は「隣接ペア（adjacency pairs）」とする。メイナードは、「「隣接ペア（adjacency pairs）」とは、「問い」―「答え」、「挨拶」―「挨拶」、「申し出」―「受容」、「陳謝」―「軽い否定」のような、一対になった発話の組合せのことである。ある話者が次の話者を選ぶ方法の一つであり、「話者交替ルール」が会話の各部に適用される仕組みになっ

ていること（local management organization）と深くかかわっている。」（同・一四頁）と述べる。

（参考文献）

庵　功雄（一九九六）「「それが」とテキストの構造―接続詞と指示詞の関係に関する一考察―」『阪大日本語研究』8大阪大学文学部日本語科言語系
池上禎造（一九四七）「中古文と接續詞」『國語・國文』第一五巻第二〇号、京都帝國大學國文学会
糸井通浩（一九八七）「中古文と接続語―「かくて」「さて」を中心に―」『日本語学』第六巻第九号、明治書院
M・A・K・ハリデイ　ルカイヤ・ハサン　〈安藤貞雄・多田保行・永田龍男・中川憲・高口圭轉訳〉（一九九七）『テクストはどのように構成されるか―言語の結束性―』『言語学翻訳叢書第8巻』、ひつじ書房
エリク・ロング（一九九五）「『源氏物語』における談話分析の試み」『日本語学』vol14、2月号、明治書院
岡崎友子（二〇〇二）「指示副詞の歴史的変化について―サ系列・ソ系を中心に―」『国語学』第五三巻三号、国語学会
岡崎友子（二〇一一）「指示詞系接続語の歴史的変化―中古の「カクテ・サテ」を中心に―」『日本語文法の歴史と変化』青木博史編、くろしお出版
神谷かをる（一九八六）「中古語の文と句の連接―源氏物語の頃まで―」『日本語学』vol5、一〇月号、明治書院
京極興一・松井栄一（一九七三）「接続詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座6接続詞・感動詞』、明治書院
金水敏・田窪行則編（一九九二）『日本語研究資料1　指示詞』、ひつじ書房
甲田直美（二〇〇一）『談話・テクスト展開のメカニズム―接続表現と談話標識の認知的考察―』、風間書房
佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編（一九九七）『文章・談話のしくみ』、おうふう
佐久間まゆみ（二〇一〇）『講義の談話の表現と理解』、くろしお出版
信太知子（一九九五）「『平家物語』における談話」『日本語学』vol14、2月号、明治書院
鈴木一彦、林巨樹編（一九七三）『品詞別日本文法講座9　助詞』、明治書院
田窪行則・金水敏（一九九七）「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』音声文法研究会編、くろしお出版
中井陽子（二〇〇三）「言語・非言語行動によるターンの受け継ぎの表示」『早稲田大学日本語教育研究』3　早稲田大学大学院日本語教育研究科
西野容子（一九九三）「連載：語用論の現在と将来（3）―会話分析について―ディスコースマーカーを中心として―」『日本語学』12巻5号、明治書院
初鹿野阿れ（一九九八）「発話ターン交代のテクニック―相手の発話中に自発的にターンを始める場合―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集24』、東京外国語大学留学生日本語教育センター
長谷川哲子（二〇〇〇）「転換の接続詞「さて」について」『日本語教育』一〇五号、日本語教育学会

ポリー・ザトラウスキー（一九九三）『日本語研究叢書5　日本語の談話の構造分析―勧誘のストラテジーの考察―』、くろしお出版
メイナード・K・泉子（一九九三）『会話分析』、くろしお出版
（参考資料）
松村明編（一九七一）『日本文法大辞典』明治書院
中村幸彦、岡見政雄、阪倉篤義編（一九九九）『角川古語大辞典』角川書店
日本語文法学会編（二〇一四）『日本語文法事典』大修館書店
（用例採集資料）
・『大和物語』、『平中物語』、『落窪物語』、『堤中納言物語』、『浜松中納言物語』、『源氏物語』、『保元物語』、『平治物語』、『平家物語』、『住吉物語』、『とりかへばや物語』、『狂言集』以上全て『新編日本古典文学全集』（小学館刊行）に拠った。
・『天草版平家物語』は、江口正弘著（一九八六）『天草版平家物語対照本文及び総索引』（明治書院刊行）に拠った。
・検索サイトジャパンナレッジ http://japanknowledge.com/（最終アクセス日　二〇一七年八月二十八日）

（「引き取りのサテ」用例）
※用例の傍線は論者による。
・中古
（1）「さ聞きはべり」といらへけり。男、「さて、それをばいかが聞きたまふ」といひければ、女ふといらへけり。（うた）われもしかなきてぞ人に恋ひられし今こそよそに声をのみ聞け　と読みたりければ、限りなくめでて、この今の妻をば送りて、（『大和物語』一五八段、三九四頁）
（2）それを、この男とものなどいひて知れるが、そのなかにありける、「さて、この男はたれとかいひつる」といひければ、名をいひければ、このあしと思ひける女、（『平中物語』二五段、四九六頁）
（3）返し、　山菅は思ひやまずのみ繁れどもなにか妹背の山はくづれむ　かくいひつつ、「さて、いかで。ありしやうなることをぞよき」といへど、（『平中物語』二九段、五一一頁）
（4）「この、のぞきたまへる人は、この、南に宿りたまへるか」と問ふ。「さなり」「さて、その人ぞ」など問へば、（『平中物語』三六段、五二六頁）
（5）「上も聞いたまひては、『よし』とはのたまひてむや」とのたまひて、「さてあらぬ時は、よくやは聞こえたまひてや。（『落窪物語』、巻之一、二四頁）
（6）「いとほしきこと」と申したまへば、「さて、それがいつかありきしたる。旅にては、縫物やあらむとする。なほ、ありかせそめじ。うちはめて置きたるぞ」（『落窪物語』、巻之一、三〇頁）
（7）「よろこびたまひて、さざめき騒ぎたまひて、文やらせたまふめり」と言へば、「いとうれしく。さて」と言ひて、いとよくほほゑみたるまみ、口つきの、灯のあかきに映えて、にほひたるものから、恥づかしげなり。（『落窪物語』巻之一、八九頁）
（8）静心なくて、「さて、いつか」と言へば、「今宵ぞかし」と言へば、「今日は御忌日なるを。何か疑ひあらむ」と言へば、（『落

窪物語』巻之二、一二〇頁）

(9)「心地はいとあし、この翁の近づきたるになむ、いとわびしき、その遣戸掛けこめて、な入れそ」とのたまへば、「さて腹立ちなむ。なほなごめさせおはしませ。」（『落窪物語』巻之二、一二五頁）

(10)「誰かはただ今、『去りたまへ』『捨てたまへ』と聞こゆる」「さて、さにはあらずや。めあはせたてまつりたまはば」「いで、あなかしがまし。取り出でても、さまあしからむか。などかおどろおどろしうは言ふべからむは。かたへは妻を思ふなめり」（『落窪物語』巻之二、一九三頁）

(11)「はじめてやんごとなくのみ思ほしまさりけむ」とのたまへば、殿いとよくほほゑみて、「さて、そらごとは」とのたまひて、近う寄りて、「かの『落窪』の、言ひたてられて、さいなまれたまひし夜こそ、いみじき志はまさりしか。」（『落窪物語』巻之四、三一六頁）

(12)「烏毛虫だちためり」「さて、歯ぐきは、皮のむけたるにやあらむ」とて、（『堤中納言物語』「虫めづる姫君」四一〇頁）

(13)「なりにけれ」とのたまへば、北の方、「さて、斎宮をば、何とか定めきこえたまふ」と言へば、小命婦の君、「をかしきは、」（『堤中納言物語』「はなだの女御」四七五頁）

(14) 三位中将、「いとなほき木をなむ押し折りためる」と聞こえたまふに、うち笑ひたまへば、みな何となくさと笑ふ声聞えやすらむ。中納言、「さて呼び返さざりつるさきは、いかが言ひつる。これやなほしたる定」と問ひたまへば、「久しう立ちてはべりつれど、ともかくも侍らざりつれば、（『枕草子』第三三段、八一頁）

(15)「改まらざるものは心なり」とのたまへば、「さて『はばかりなし』とは、何を言ふにか」とあやしがれば、笑ひつつ、「仲よしなども人に言はる。」（『枕草子』第四七段、一〇六頁）

(16)「この事どもよりは、昼斉信がまゐりたりつるを見ましかば、いかにめでまどはましとこそおぼえつれ」と仰せらるるに、「さて、まことに常よりもあらまほしうこそ」など言ふ。「まづその事をこそは啓せむと思ひてまゐりつるに、物語のことにまぎれて」とて、（『枕草子第七九段、一四四頁）

(17)「手を打ちてさわぎはべりつる」など言ひさわぐに、内より仰せ言あり。「さて雪は今日までありや」と仰せ言あれば、いとねたうくちをしけれど、「『年の内、ついたちまでだにあらじ』と人々の啓したまひしに、（『枕草子』第八三段、一六三頁）

(18)「雨降りぬ」と言へば、いそぎて車に乗るに、「さてこの歌は、ここにてこそよまめ」など言へば、「さはれ、道にても」など言ひて、みな乗りぬ。（『枕草子』第九五段、一八六頁）

(19) 藤侍従の、一条の大路走りつる語るにぞ、みな笑ひぬる。「さていづら、歌は」と問はせたまへば、かうかうと啓すれば、「くちをしの事や。」（『枕草子』第九五段、一八九頁）

(20)「幼き者などもありしに思ひわづらひて、撫子の花を折りておこせたりし」とて涙ぐみたり。「さて、その文の言葉は」と問ひたまへば、「いさや、ことなることもなかりきや。」（『源氏物語』帚木、八二頁）

(21) 渡殿の戸口に寄りゐたまへり、いとかたじけなしと思ひて、「例ならぬ人ははべりてえ近うも寄りはべらず」、「さて今宵もやかへしてんとする。いとあさましうからうこそあべけれ」とのたまへば、「などてか。あなたに帰りはべりなば、たばかりはべりなん」と聞こゆ。（『源氏物語』空蟬、一二二頁）

(22)「おのづからもの言ひ漏らしつべき眷属もたちまじりたらむ。

まづこの院を出でおはしましね」と言ふ。「さて、これより人少ななる所はいかでかあらん」とのたまふ。「げにさぞはべらん。」（『源氏物語』夕顔、一七二頁）

(23)「しか。一昨年の春ぞものしたまへりし。女にていとらうたげになん」と語る。「さていづこにぞ。人にさとは知らせで我に得させよ。あとはかなくいみじと思ふ御形見に、いとうれしかるべくなん」とのたまふ。「かの中将にも伝ふべけれど、言ふかひなきかごと負ひなん。」（『源氏物語』夕顔、一八六頁）

(24)「後の世の勤めもいとよくして、なかなか法師まさりしたる人になんはべりける」と申せば、「さて、そのむすめは」と問ひたまふ。「けしうはあらず、容貌心ばせなどはべるなり。（『源氏物語』若紫、二〇三頁）

(25)「いとすきたる者なれば、かの入道の遺言破りつべき心はあらんかし」、「さてたたずみ寄るならむ」と言ひあへり。「いで、なにしに。さいふとも田舎びたらむ」と言ひあへり。（『源氏物語』若紫、二〇四頁）

(26)「御返りはさらに。聞こえさせたまふをりばかりなむ。それをだに、苦しいことに思いたる」と聞こゆ。「さてこの若やかに結ぼほれたるは誰がぞ。いといたう書いたる気色かな」とほほ笑みて御覧ずれば、「かれは、執念うとどめてまかりにけるこそ。」（『源氏物語』胡蝶、一七九頁）

(27) いときよげにものものしく、はなやかなるさまして、おぼろけの人見えにくき御気色をも見知らず、「さて、いつか女御殿には参りはべらんずる」と聞こゆれば、「よろしき日などやいふべからむ。よし、ことごとしくは何かは。さ思はれば、今日にても」と、のたまひ棄てて渡りたまひぬ。（『源氏物語』常夏、二四六頁）

(28) 宮いと切にをかしと思いたり。さればよと御気色を見て、いとど御心動きぬべく言ひつづけたまふ。「さて、そのありけん返り事は、などか見せたまはざりし。まろならましかば」と恨みたまふ。「さかし。いとさまざま御覧ずべかめる端をだに見せさせたまはぬ。（『源氏物語』橋姫、一五四頁）

(29) あまりおどろおどろしきことと耳とまりける。「さて、かの北の方にはかくとものしつや。心ざしことに思ひはじめたまふらんに、ひき違へたらむ、ひがひがしくねぢけたるやうにとりなす人もあらん。いさや」と思したゆたひたるを、「何か。北の方も、かの姫君をばいとやむごとなきものに思ひかしづきたてまつりたまふなり。」（『源氏物語』東屋、三一頁）

(30)「わがもとにあれかし。あなたももて離るべくやは」とのたまへば、「さてさぶらはんにつけても、もののみ悲しからんを思ひたまへれば、いま、この御はてなど過ぐして」と聞こゆ。「またも参れ」など、（『源氏物語』蜻蛉、二二九頁）

(31)「一昨年の秋も、ここにはべる人の子の、二つばかりにはべしをとりて参で来たりしかども、見驚かずはべりき」「さてその児は死にやしにし」と言へば、「生きてはべり。」（『源氏物語』手習、二八三頁）

・中世

(1) 平判官康頼、参りて、「ああ、あまりに平氏のおほう候に、もて酔ひて候」と申す。俊寛僧都、「さてそれをばいかが仕らむずる」と申されければ、西光法師、「頸をとるにしかじ」とて、瓶子のくびをとってぞ入りにける。（『平家物語』覚一本、巻第一、鹿谷、七二頁）

（2）行綱ちかうより、小声になッて申しけるは、「其儀では候はず。一向御一家の御上とこそ承り候へ」。「さてそれをば法皇もしろしめされたるか」。「子細にや及び候。」（『平家物語』覚一本、巻第二、西光被斬、一〇八頁）

（3）と問ひ給へば、「春日大明神の御鳥井なり」と申す。（略）「さてあのくびはいかに」と問ひ給へば、「是は平家太政大臣入道殿の御頸を、悪行超過し給へるによって、当社大明神の、召しとらせ給ひて候」と申すとおぼえて夢うちさめ、（『平家物語』覚一本、巻第三、無文、二三二頁）

（4）「『文覚無上の願をおこして、勇猛の行をくはたつ。ゆいて力をあはすべし』と、明王の勅によッて来れるなり」とこたへ給ふ。文覚声をいからして、「さて、明王はいづくにましますぞ」。「都率点に」とこたへて、雲井はるかにあがりたまひぬ。たなごころをあはせてこれを拝み奉る。（『平家物語』覚一本、巻第五、文覚荒行、三七九頁）

（5）「『此使にたぶべし』と書け」といひければ、言ふままに書いて、「さて、誰どのへと書き候はうぞ」。「清水の観音房へと書け」。（『平家物語』覚一本、巻第五、文覚被流、三八七頁）

（6）「閻魔の庁より、平家太政入道殿の御迎に参ッて候」と申す。「さて其札は何といふ札ぞ」と問はせ給へば、「南閻浮提金銅十六丈の盧舎那仏焼きほろぼし給へる罪によって無間の底に堕ち給ふべきよし閻魔の庁に御さだめ候が、無間の無をば書かれて、間の字をばいまだ書かれぬなり」とぞ申しける。（『『平家物語』覚一本、巻第六、入道死去、四五〇頁）

（7）「かかる忘れがたみを今まで見ざりける事よ」とて、御涙せきあへさせ給はず。浄土寺の二位殿、そのときはいまだ丹後殿とて御前に候はせ給ふが、「さて御ゆづりは、此宮にてこそわたらおはしましさぶらはめ」とせ申させ給へば、法皇、「子細にや」とぞ仰せける。（『平家物語』覚一本、巻第八、山門御幸、一〇一頁）

（8）「其上城のうちにはおとしあなをもほり、ほしをも植ゑて待ち参らせ候らん」と申す。「さてさ様（やう）の所は鹿はかよふか」。「鹿はかよひ候。（『平家物語』覚一本、巻第九、老馬、二〇四頁）

（9）『御兄弟の御なかには、備中守殿ばかり一谷にてうたれさせ給ひて候』と、申す者にこそあひて候ひつれ。『さて小松三位中将殿の御事はいかに』と問ひ候ひつれば、『それはいくさ以前より、大事の御いたはりとて、八島に御渡り候間、此たびはむかはせ給ひ候はず』（『平家物語』覚一本、巻第十、首渡、二六〇頁）

（10）「もし中将の君達とや人の申しさぶらひけん、昨日武士のとり参らせてまかりさぶらひぬるなり」と申す。「さて武士をば誰といひつる」。「北条とこそ申しさぶらひつれ」。（『平家物語』覚一本、巻第十二、六代、四六七頁）

（11）「或は念仏申す者も候、或は涙をながす者も候」。「さて此子は何としてあるぞ」と宣へば、「人の見参らせ候ときは、さらぬやうにもてなして、御数珠をくらせおはしまし候が、（『平家物語』覚一本、巻第十二、六代、四七一頁）

（12）「よき敵三人に逢うたる心地こそし候ひつれ」と申す。「さて正明をばいかが思しめされ候ひつる」と申せば、「それはとられなんうへは」とぞ宣ひける。（『平家物語』覚一本、巻第十二、泊瀬六代、四八三頁）

（13）その瀬に身をもなげられなんだ心中わ、まことにをろかなことでござった。右馬、さてこれわまことにあわれなことであったなう？　して少将や、康頼わそのままのぼられてあったか？　喜

一．そのをことぢゃ：この人々わ鬼界が島を出て、（『天草版平家物語』巻第一、第十一、少将、康頼みやこえ帰らるる道すがらのこと、七七頁）

(14) 平家の末わなんとあらうか？　恐ろしいことぢゃ．右馬．さて誠に誰にも、かれにも清盛わ難義をかけた人ぢゃの？　またその祇王がことをも聞きたい．お語りあれ。喜一　長いことなれども、申さうず．（『天草版平家物語』巻第二、第一、祇王清盛に愛せられたこと：同じく仏という白拍子に思いかえられてのち、親子三人尼になり、世を厭うたことと、またその仏も尼になったこと、九三頁）

(15) 弔い奉ったと、言うたれば、（略）物語をめされて仰せらるるわ：さて頼朝わ勅勘を許されいでわ、何として謀叛をも起さうぞとあったれば、それわやすい事でござる（『天草版平家物語』巻第二、第九、文覚のすすめによって頼朝の謀叛ををこさせられたことと、平家わまたこれを平げうとて、討手をくだされたこと、一四五頁）

(16) 西海の旅の空までも吹く風の声、立つ波の音につけても、ただ今の聞くやうに思われたと、聞こえてござる．右馬．さて平家の一門のうちに都にとどまられたわなかったか？　喜　そのをことぢゃ（『天草版平家物語』巻第三、第八、平家一門わ都を落ちらるるそのうちに池の大納言殿わ都にとどまられたこと：同じく福原を立たるとて、一門の人々名残を惜しまれたこと、一八七頁）

(17) 高倉の院の幼いを時にそっとも違わぬと仰せられて、を涙を流させられた．そこに丹後殿と申した女房衆がいられたがこれを見まらして、さてを譲りわこの宮でこそござらうずれと申されたれば、法皇子細にも及ばぬことぢゃと仰せられた．（『天草版平家物語』巻第三、第九、法皇鞍馬の寺から比叡の山え還御あったことと、平家の西国え落ちられてからのこと、一九九頁）

(18) 源氏どもに破られて、屋島え渡らせられたと申す．さて三位の中将わ何とと、問いまらしたれば、その日の軍以前に、大事のをいたわりで屋島え渡らせられたによって、今度のをことわ軍にわあわせられぬとこそ申してござれと申せば（『天草版平家物語』巻第四、第十、都で平家の一門の首を渡いたことと、三位の中将夫婦の沙汰、二八七頁）

(19) 首をはにょうと申せば、申すまでもなうやがて賜わったれば、六条河原で切って、緒方わかいがいしゅう頼まれたと申す．右馬．さてついにわ兄弟のを仲なんとなったぞ？　喜一　義経わ院の御所え参って、大蔵卿をもって申されたわ：義経こそ鎌倉から討たれうずるでござる．（『天草版平家物語』巻第四、第二十五、義経の都を落ちられたこと：並びに北条の上洛のこと、三七九頁）

(20) 小松の三位中将殿の若君今年わ十二にならせらるるが、よにうつくしゅうござるを昨日武士に捕られてござる：あまりいとうしゅうござれば、請い取ってを弟子にさせられいかしと、申せば：文覚さて一定この山に置かせられうか？　なかなかを命さえ助からせられば、聖の御坊のをままと申した．（『天草版平家物語』巻第四、第二十六、六代を北条召しとってのち、文覚わびことによって頼朝放免せられたこと、三八六頁）

(21) 明日こそまかりくだりまらすれとて、念仏を申すもござり、そばに向いて涙ぐむ者もござると申せば：さて六代わなんとあるぞと、仰せらるれば：人の見まらする時わ、数珠つまぐらせられ、さらぬやうにもてなさせらるるが、（『天草版平家物語』巻第四、第二十六、六代を北条召しとってのち、文覚わびことによって頼

朝放免せられたこと、三八九頁）

(22) 御前なる人々、「いなや、この昼、世に失せたまへるとののしる大将殿こそこれにおはしましつれ」と言ふに、あやしあやしと聞きたまひて、うちほほ笑みて、「さて、さて」と問ひたまへば、「狩装束にてあの小柴垣のもとにこそ立ちたまへりつれど、わづらはしさに音もしはべらざりつれば、立ちわづらひて帰りたまひぬ」と言ふに、（『とりかへばや物語』巻第三、三五三頁）

(23) 喜びて、白き袿一襲、「三の君の」とて賜びぬれば、「さて、少将殿には、もとの御心ざしの御方とこそ申しはべらめ」と申せば、「よくのたまひたり。そのよしを」とて、（『住吉物語』上巻、三〇頁）

(24) 中納言殿あきれつつ、「こは何ごと」と問ひたまへば、「申し出づるにつけても、心憂し」、「さて何ごと」と問ひたまへば、「六角堂の別当とかや言ふ法師、忍び姫君のもとへ通ひけること、さらに知らず。（『住吉物語』上巻、六四頁）

(25) 中納言、「などか、これを言はずあるらん」と嘆きたまふ。「さて昨夜、この東の妻戸に御車のさぶらふを、御方々の人、御参りと思ひて、目もとどめて見はべらずさぶらひし。」（『住吉物語』上巻、九五頁）

※『狂言集』の用例（六八例）は紙幅の都合で省略する。

（ももせ・みのり　本学大学院博士後期課程）